

論文

舟山群島における漁村女性の労働と自己認識の変化

— 蟻島の“漁嫂”⁽¹⁾の暮らしとその変化をめぐって —

于 洋

YU Yang

はじめに

舟山群島新区⁽²⁾の発展には、海洋文化に支えられることが非常に重要と考えられている。海洋文化には、昔から海洋社会の形成過程、漁業生産と発展の歴史、漁村に伝承される豊富な民俗文化などが含まれる。こうした海洋文化は、人々の心理や意識に作用しながら、島の人々の精神的な支えとなってきた。今後も独特な海洋民俗をつくりあげていくことになるだろう。

海洋社会という概念について、楊国楨は、直接的あるいは間接的な各種海洋活動の中に、人と海、人々の間から形成した各種関係の組合、海洋社会団体、海洋地域社会、海洋国家など、各レベルの社会組織とその構造システムを含むとしている。つまり、社会生活主体としての人と各種の社会組織、観念意識、文化行為と方式などが、一時的に海洋と相互交流をすれば、すべて海洋社会の基本的内容になると思われると述べている。(楊国楨 2000)

海洋社会の基礎的な構成単位としての漁村において、漁業生産は漁村の主要な生業として昔からずっと重要な地位を占めている。漁業というと、一般には男性が主に活動しているイメージがあった。しかし、男性による出漁以外にも、例えば、網の修繕、漁獲物の売買、家事のほとんどなどは女性の活躍があり、その活躍により漁師の生活を維持している。また、漁村の生活は漁業だけではない。近年、舟山群島の漁村女性による起業的な活動が増加している。これらの活動には、水産物の加工・養殖・販売という内容のものが多く、また「漁家楽」というレジャー漁業は舟山群島の特徴的な産業になった。こうした副収入の創出という漁家経営や、女性労働の経済的評価から見ることのできる意義に注目することにより、漁村女性たちは舟山群島新区の振興と発展の新たな担い手として期待されている。

1 本論の目的と調査地の選定

(1) 本論の目的

中国は伝統的に父系社会であり、従来の研究は男性をめぐる視点からの研究が一般的であったが、近年になると世界中にジェンダーフリー運動が広がり、それとともに、各領域の研究はジェンダーの視点から再考察されるようになった。本研究では、ジェンダー視点から、中国解放以降、特に改革开放後の30年を通じ、浙江省の舟山群島における漁村の現状の変化はどのようなものであったのか、漁家における女性たちの労働参加の変化に焦点を当てることにより、家や村での位置づけがどう変化

してきたのか、そして彼女たちがどのような意識を持ちながら働いてきたのか、さらに近代以降自己認識がどのように変化してきたのか、という点について考察していく。

(2) 調査地の選定

舟山は国内で唯一の島嶼によって形成された地級市であり、1390の島嶼を含む。東部沿海地域の真ん中にあり、北は山東省の膠州湾や渤海湾に連なり、南は福建省や広東省に連なり、西には長江が海に注ぐ地点と杭州湾があり、東は太平洋に直接面しており（図1）、中国の沿海省の中で太平洋に最も近い群島である。

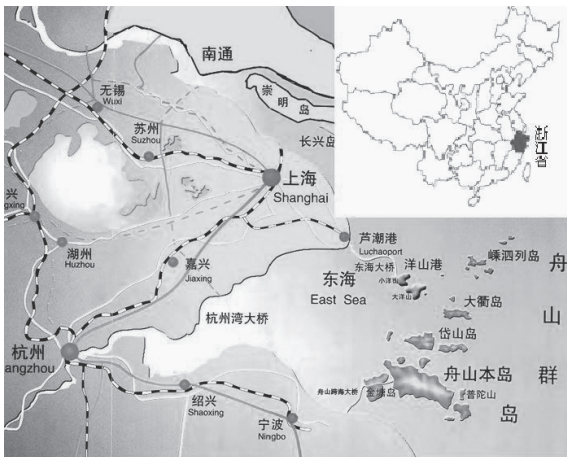


図1 舟山群島の位置

舟山群島海域の深水海岸線の長さは280キロメートルに達しており、全国の18.4%を占め、港湾建設の条件に優れている。港湾物流、臨海工業、海洋観光、海洋漁業を根幹とし、海洋島の特色を鮮明に備えた海洋経済システムがすでに形成されている。

筆者は2005年からこれまで、舟山群島の普陀区の蟻島という漁業郷、また蟻島の近くにある世界的に有名な観音寺院をもつ普陀山において、何回もフィールドワークを行ってきた。蟻島は、1958年9月26日に中国初の漁業人民公社である蟻島人民公社を設立したことで知られる。

すなわち、蟻島が遂げてきた発展の過程は、中国の漁業発展の歴史の縮図であるといえる。また、蟻島の漁村で女性たちが労働に参加してきた歴史は全国的にも知られており、こうした意味でも蟻島は、舟山群島の全体、更に中国全体の漁村における女性の地位や役割を分析するうえで代表的な地域と考えられる。

2 先行研究のまとめと問題の所在

(1) 先行研究のまとめ

民俗学にとって「男と女」とは永遠の命題である。どここの国でも人々の暮らしの中の文化を研究対象とする民俗学において、例えば年中行事や通過儀礼、また口承文芸や民俗芸能、あるいは生業や衣・食・住について考える時、いかなる場合においても、男と女をめぐる問題は避けて通ることができない課題である。民俗学においては、「ジェンダー」あるいは「女の民俗」を対象とした研究は、どの学問領域よりも早くから着手された。（服部誠・山崎祐子・八木透 2008）今日、男と女をめぐる様々な社会問題の大半が「ジェンダー」に起因するといえるだろう。特に、「ジェンダー・フリー」と「ジェンダー・バイアス」というような言葉は一時的によく使用され、社会学や心理学、あるいは社会福祉の領域で研究されてきた傾向がある。民俗社会における「ジェンダー」をめぐる問題は、村落運営や社寺祭祀、あるいは様々な年中行事において、避けては通れない課題になっている。例えば、「近代家族」は「男は公共領域、女は家内領域」という性別役割分業論に立脚した家族の形態で

あり、男たちには家を代表する公的立場でふるまうことが求められ、一方女たちは、家を守りながら夫や舅を助けるという役割を担っていた。また、生業に関しては、漁業において、女性は相応の労働をしながらも、家庭では基本的には専業主婦であり、賃金をとまわらない労働、すなわち市場化されない労働を行い、かつてはその価値が正当に認識されていなかった。その意味で、生業における労働に限って言えば、男と女に同等の価値が与えられていなかったといえる。

日本の漁村女性の研究は、明治以降蓄積されてきた膨大な数の資料がある。「女性の労働」という項目が柳田国男の『民俗学辞典』に所収され、たくましく働く漁村の女性たちの姿を捉えている。柳田国男は、『女性と民間伝承』や『妹の力』を代表著作としており、瀬川清子・江馬三枝子・大藤由紀などの女性研究者が膨大な資料の収集を行い、機関誌を刊行した。その中心的役割を果たしたのが「女性民俗学研究会」であり、機関誌の『女性と経験』であった。

漁村における女性の働き・地位・役割について、民俗学に関する瀬川清子らの先行研究がある。日本の各地の漁村で労働をする女性を対象とした瀬川氏の研究では、女性たちは漁業以外にも家事や農作業といった様々な活動を行っていたことがわかる。『女の民俗誌 そのけがれと神秘』の中で民俗学に接したのは、全国にわたる海村調査の始まる頃であったと述べている。また、『海村生活の研究』の中における「海村婦人の労働」という章において、「海村の中には、漁業らしい漁業はせず、全く海に背いて農耕生活をして居る村は思いの外に多く、漁村と目せられる村も実は半農半漁が普通で、男漁女耕が漁村の常道になっている」と述べている。(瀬川清子 1981:115) 女性は漁に参加せずとも農作業に関する労働を行っていたというもので、男性が海上作業を専門的にを行い、女性はその補助労働を行うという、どこにでもある漁村の女性についての研究ではなかった。また女性も鮮魚の加工、漁獲物の販売などを担うことも多く、その上男性が漁にでる際に女性は、家のこと一切をまかされる。瀬川氏の報告からわかるように、漁撈活動が中心の漁村においても、仕事の量は男性より女性の方が多かったといっても過言ではない。高桑守史は漁村において男性は漁撈活動に従事する一方で、家族の営むことは女性の知恵に依るとし、夫の獲ってきた海産物の加工や販売も女性の仕事としている。(高桑守史 1994:37) 瀬川は、賃金を稼ぐにはどのようにしなければならなかったのか身をもって体験し、「女の働き」に注目していた。瀬川は、「なぜ、女の地位が低くなったのか」を問いつけ、「女性劣位」をなぜ、女性自ら認めるようになったのかを問題とした。「女の不幸の最大のものは、自分の働きの価値を知らなかったことである。知らされなかったことであった」と結論づけている。女の地位はもともと低かったのではない、自分自身の働きに対する経済価値換算の認識がなされていなかったためである、と主張した。(瀬川清子 1962)

岡田照子は、U氏の農家経営の事例研究をもとに、地域社会の構造、男女・家族間の労働内容と家計、家庭内での地位・役割を分析した。その結果、女性の労働について、料理・洗濯・掃除などの家事は、一切労働時間に含まれず、農業労働のみが労働とみなされることを明らかにした。(岡田照子 2012) その論文に対し、瀬川は「家事は働き(労働)でないという男の証言」を得た、実証したとして評価してくれたものの、「女自身は、家事は労働ではないとは思っていないとしても、なぜ女が、自分自身の女性劣位を認めるのかを自分にわかるように説く」と主張した。さらに、瀬川は「問題はそこ(女性自身が自分の劣位を認めること)にもあると思う」と付け加えた。(瀬川清子 1962) 女性の生活経験ということを重視しながら、そこに止まらず、男性主体の先入観や偏見を排して、男

女平等や男女共同参画にかかわるような、重要な社会問題を指摘しているのである。

中道仁美は、『女性から見る日本の漁業と漁村』（農林統計出版、2008）において、日本の漁業・漁村女性研究の発展と漁業・漁村女性の地位向上に寄与し、ひいてはそれが世界の漁業・漁村女性研究の発展と、漁業・漁村女性の地位向上につながることを指摘している。

岩崎繁野は、女性が夫や子どもと共に漁し漁撈を行い、自営漁業や水産加工、行商などに参加することを指摘している。女性が漁業に従事する生活時間の変化や生活環境の変化についても述べており、家事なども行わなければならない女性の多忙さを明らかにしている。女性は男性の補助的労働と、さらに家事・育児を行っていたが、漁業における女性労働の社会的ないし家族内での労働経済的評価についてはほとんど取り上げられてこなかったのである。（岩崎繁野 1957）

三木奈都子は、漁家における女性労働の統計的整理と性別分業の態様を把握したうえで、家族経営の中での女性労働の位置づけに関する研究を行い、「漁家の女性の就業は、地域の雇用就業機会の少なさから、盛漁期には漁業に従事をして、その他の時期は、自営業や臨時日雇いの雇われ就業と組み合わせ、あくまで漁業労働に補助的な就業を中心に行ってきた」と指摘している。また、三木も沿海地区漁協におけるジェンダー関係と漁業協同組合における男女共同参画についての研究を行い、「近年、漁協婦人部の活動において、女性のローカルで練り広げられる水産物加工や販売などの漁村特有の起業が見られる」としている。（三木奈都子 1997）

漁村における女性の起業的な取り組みに関する研究は、三木奈都子と副島久実が行った。三木は、漁村女性起業化グループに関する漁協女性部の加工販売活動は、漁協女性部の自主的な取り組みとして行われていることを紹介している。その支援は、担い手対策ができると同時に、地域が活性化されるだけでなく報酬が受け取れることで、個人の活性化をもたらし、水産業への女性の参画を促すと指摘される。副島は、漁村女性起業グループ活動は、副収入機会を創出しながら、地域特産物の開発やグループ活動を通じて得られる他地域の人との交流という意義が見られるという。（副島久実 2010）

一方、中国における女性の労働に関する研究は、都市と農村の女性に関する研究はたくさん蓄積しているが、漁村においてはまだ少ない。

都市の女性の労働参与に関する研究は、沈可の「中国の家庭構成の中に『多世代同堂』という居住モデルの比率が減っている現状になり、女性は育児と家事への労働時間が増えてきて、その結果、女性の労働参加は減少している」と指摘している。（沈可 2012）姚先国は、「計量経済学の方法で、中国の家庭収入と都市婦女の労働参与の決定との関係を分析してから、中国の経済の転換時期において、女性労働参与率は著しく減っているのが現状であり、その原因は家庭収入の増加と家庭再分業により、それが自由選択しているというよりも、就業自体が厳しくなる傾向のせいではないか」と指摘している。（姚先国 2005）孫楽は、「中国の改革解放以降、女性は社会の労働参与の機会を創出させるようになったが、女性が家庭のほとんどの家事を担う現状は変わらず、実は女性の負担が昔よりもっと重くなった」という。（孫楽 2009）

農村において、蘇群と周春芳は、「農民は現実の生活方式を転換していく過程において、女性は労働力の主要な構成要素と家庭決定の重要な参与者として、彼女らの役割が軽視できない」と指摘している。また、高小賢の「中国現代化と農郷婦女地位の変遷」と「地元中国農郷労働力移動及び農業女性化傾向」、孟憲範の「農業労働力移動中の中国農郷女性」により、農村婦女の労働力移動の問題を

研究するうえで、農村婦女の非農産業へ移行する傾向と、その停滞した後れの原因をまとめて分析した。(蘇群・周春芳 2005)

舟山群島の漁村に関する専門研究は、中国において、姜彬⁽³⁾、金濤⁽⁴⁾が編集した『東海島嶼文化と民俗』(上海文芸出版社、2005年)は海島生産習俗の変遷、特徴と規律を論述しており、さらに漁撈習俗、魚類加工と貿易習俗、養殖、魚介類を採る習俗及び海に関わる他の習俗を具体的に分析して考察している。それと同様に、海島民の長期的な生産生活実践においては、豊富な文学芸術を創造して、島民の生産生活及び彼らの理想と願望に反応した。しかし、漁村における女性に関する研究にはあまり言及していない。福田アジオは、2002年から2006年にかけて、浙江省民間文芸家協会とともに浙江省の象山県東門島と温嶺市箬山という漁村でフィールドワークを行い、漁村での生活を把握し、民俗の特色を考え、特に、漁村の家族・親族と民間信仰について調査している。福田は、日本文化のルーツや中国文化の影響、日本との近似性・近縁性、また表面上の類似性や共通性という文化の系統について分析を行った。その中でも、漁家の婦女と女神信仰について研究しているが、漁村の女性の労働参加の問題についてはあまり言及していない。

筆者は、修士論文「漁村女性が漁業経済においてどのような地位と役割を持っているか——浙江省の蟻島を例にして——」において、中国の漁村女性について調査して研究したが、民俗学の視点からではなく、社会学と経済学の視点から調査し研究した。実際に、漁村における女性の地位と役割についての問題は、社会学の範囲に属する。今回、修士論文の研究を継続拡大させ、民俗学の視点から舟山群島における漁村女性について再考察していきたい。

(2) 問題の所在

以上の日本の漁村女性の働きに関する先行研究のまとめから、中国の漁村女性の労働について、昔からの伝統的な漁業を中心に暮らしてきた女性の姿の現状を述べたい。彼女たちは大変な労働に従事するが、家族に対しての経済的貢献がまったく見えなかった。近代の人民公社時代から、漁村女性は公社の中で働いていた。収入が得られるようになり、特に改革解放後、政策転換により漁村の産業も大きく変化し、女性は家事専業から、出稼ぎと自主創業の事例も増加してきた。こうした「テーマ」(詳細は後述)から「労働の主体」への変化は、女性たちの自己認識にどのような影響を及ぼしたのか。また、現代女性の権利を守るために設立される婦女連合会は漁村女性の労働参加と女性自身の成長に如何なる役割を果たしたのか。以上を分析する必要があると考えている。

本稿は主として現地における聞き取りと観察に基づいたものである。現地調査は2006年から2011年にかけて、数回にわたって行った。さらに浙江省の海洋漁業局と蟻島の郷政府に依頼して、漁村女性の労働参加についてのアンケート調査を行い、それに基づいて、舟山群島の蟻島という漁村での現地調査から、漁家女性の労働の変化について検討した。

I 舟山群島の漁業発展略史と調査地の概況

浙江省には小さな島が多い。その数は舟山群島を主として2000を超え、中国全体の3分の1を占める。人が住んでいる島は96あり、群島の周辺と外側の海域は有名な舟山海区である。舟山群島の

中心は舟山本島で、その本島に行政を置くのが1300を超える島嶼を含む2県2区からなる地級市の舟山市だ。中国の国務院が設置を認めた「舟山群島新区」の範囲は、舟山市の現行の行政区域と同じだという。舟山市は、経済発展がいちじるしい中国東部沿海地域の中央に位置する。北には上海や長江が海に注ぐ地点があり、西には杭州湾、東は太平洋に直面し、南は福建省や広東省に通じる。一帯は、20世紀後半から急速に工業発展を遂げた長江デルタ地域に含まれ、中国の経済発展を支える重要地点である。

舟山群島海域の深水海岸線の長さは280キロメートルに達し、全国の約18%を占めている。そして、海洋産業のインフラが整っていることも大きい。舟山漁場は中国一の漁場であり、その面積は10.6平方キロメートルで、大陸棚の漁場面積は57.29平方キロメートルである。

舟山は、新石器時代にはすでに人が定住していた。周代以前は、「海中洲」と呼ばれ、春秋時代は「甬東」と呼ばれ、唐代の名は翁山、宋と元朝に昌国になり、明と清の前期に「舟山」と改称され、後期の康熙帝は「舟」が静ではなく、動くものなので、海が静でなければ、安寧ではなくなると考え、舟山を「定海」に改称した。「舟山」という名前は、宋代から呼ばれ始めた。「昌国州図誌」に舟山は州の南に位置し、山翼がある島であり、海に舟の集まる所なので、「舟山」と称されたと記されている。明と清の2回の「海禁」⁽⁵⁾命令は、舟山の漁民たちを強制的に内陸に移住させたので、漁業活動において莫大な災難がもたらされた。中国解放後、1953年、舟山専区が設立され、定海、普陀、岱山に分かれ、舟山群島と舟山漁場は行政的に統一された。1987年、全区を定海、普陀、岱山、嵊泗という4県、6鎮を管轄し、86郷、853大隊が含まれる。2011年7月7日、もとの舟山市は舟山群島新区に設立された。舟山は中国で最初に、また唯一の海洋経済を中心に設立された新区になった。（『舟山市誌』1992）

1 舟山群島の漁業発展略史

舟山の漁業発展史（『舟山漁誌』1985）によると大体、自採自食の砂浜で採る段階、主に自産自販と地産地販の近海生産する段階、生産加工販売においてある程度の規模があり遠洋生産出来る段階という3つの段階があるが、遠洋生産ができるようになると、漁業分配制度の変遷により、またいくつかの段階に分かれる。舟山の漁業発展はかなり遅く、特に、2回の「海禁」により早期の漁業生産成果はほとんど消滅されてしまった。このことが原因で、明清時代以後漁業資源が衰退し、漁業発展の速度も遅くなった。

(1) 早期の砂浜での採捕

B.C.4500年頃、人間はすでに舟山群島のいくつかの島に住みつき、魚介の採捕をし始めた。しかし、当時の収穫は、人間自身の生活の需要を満足させるのみであった。その時の舟山はまだ未開発の原始状態で、砂浜に、海藻、魚介、海老がたくさんあり、人々はここで漁業を始めたが、砂浜と浦の近くで採るだけで十分だった。この時の収穫は自然環境に依存するものが多く、人々は晴れの日の引き潮の間に採取するしかなかった。したがって、生産量も低く、主食にするにも不十分であり、ここに住む人々はほとんどが山で農業をしたり野生植物を採りながら、海で魚や海老を獲っていた。

最初は、砂浜は人々の漁業活動の主要な場所でもあり、食べ物を取る重要な場所でもあったので、

同一の砂浜に住んでいた人々は、その砂浜の周辺は共有領地として、ほかの地域の人に採捕させなかった。また、この時の砂浜での採取には道具は必要ではなく、専門的な技術も要らず、1人でもできるので、各地区の居民はみんな単独で採取を行い、それを外に知らせることもしなかった。そのため、この時の生産力の発展はかなり遅かった。

(2) 近海作業の出現と発展

東晋の末年(399~411)、舟山で中国の第一回目の大規模な海上の農(漁)民蜂起が起き、蜂起軍20万余りが形成され、それが12年間続いた。唐の時代も蜂起があった。人口がどんどん増え、食物(海産品も含まれる)の需給量も増した。したがって、それまで魚介や海老を獲っていた砂浜は田圃と塩田に取って変わられてしまった。採捕地が減少すると、人々は生産を近海に転換しなければならなくなった。

宋と元の時代には、近海の実産力は飛躍的に発展し、漁業生産の状況も地方誌の文献に記載された。例えば、『普陀山誌』に、600~700年前に普陀山(蟻島の4倍ぐらいの島)に住んでいた漁民は、すでに700人までになったと記載されている。

明・清時代、最初の2回の「海禁」により、舟山の漁業活動はほとんど中断され、その300~500年の間の漁業は廃滅した。しかし、移住させられた漁民たちは禁令を冒し、こっそりと舟山へ戻り出漁したため、ここの漁業は完全に廃絶されることはなかった。

(3) 近海生産の回復

1684年、清が「海禁」を解除してから、人々はここに居住できるようになり、人口も急速に増えた。ここに移動してくる居民の多くはもともと漁民で、よく舟山漁場に出漁した。ここに漁業活動が戻ると、家族と一緒に定住するようになり、船、網などの道具や様々な漁業知識も向上した。例えば、蟻島の張網作業はその時鎮海に住んでいた「陸」という姓という漁民が伝授して来た。この「海禁」解除の初期の近海生産は、その作業方式、組織形式と分配方法のいずれも、基本的に宋の方式と方法を使い続けたが、後の発展速度、生産規模はかなり速くなった。生産知識が豊かになり、海洋の状況もよく知ることができるようになり、それ以降の漁場の開拓と遠洋漁業の作業にずいぶん活かされた。例えば、蟻島では最初、苗字が「陸」という漁民だけが張網を作業したが、まもなく30戸余りがこの作業をやるようになった。

(4) 遠洋漁業の作業

160年ぐらい前から、漁業生産は近海から遠洋漁業に発展して来たが、当時の遠洋漁業とは家から少し離れた海での生産を指し、今日の遠洋漁業の意味とは違う。当時、漁をするものが増えたことで、近海の資源も不足してきた。漁民たちは近海で漁の経験を積み、道具を持っていた船主ができるだけ大きな船を作り、網主もできるだけ大きな網を作って遠洋漁業へでる準備をすすめた。遠洋漁業という組織形式と生産関係は新しい変化をもたらし、はっきりした雇用制度が出現し、いわゆる「長元制」⁽⁶⁾が生まれた。

(5) 遠洋漁業の大発展

1911年から1937年まで、当時の中国資本主義の経済発展と、漁業への投資の増加は遠洋漁業を大きく発展させた。各地の漁民は舟山に移住しはじめ、出漁の技術が高まり、漁場も開発が進んだので、天然水で鮮度を保つための運鮮船もできた。漁業の発展とともに、漁業に関わる手工業、交通運輸業、商業なども発展した。したがって、舟山漁場の名声も国内外ともに広く知れ渡り、全国でも有名な漁場になった。しかし1937年～1950年の間、ずっと継続していた戦争も舟山漁業に大災害をもたらした。1949年の1年間で海に出た漁船は僅か192艘であった。

(6) 人民公社の登場

建国の初期の頃は、合作化の社会改革が行われた。また船の機帆化をめぐる技術革新も行われたので、舟山の漁業は急速に回復していった。そして、1958年、蟻島には全国初の漁業人民公社が成立され、その後それは舟山全体に広がった。82年に人民公社が終わる頃には、漁業経済は解放以前の最高水準に達した。

(7) 株式合作制

発展が加速していた1983年以降になると、舟山の漁業生産は株式合作制となった。近年、漁業資源は衰退しており、出漁期の収入も不安定になっている。その反面、観光事業が発展するようになり、舟山の工業や交通の発達とともに家庭の収入も増加してきている。例えば、蟻島における2007年の造船所の開業によって、島の住民の就職率もかなり増加した。

2 調査地の概況

(1) 蟻島の社会概況——地理位置・人口・生業

蟻島は舟山市の普陀区に管轄され、舟山群島東南部に位置する形が蟻に似ている小さい島である。北に位置する沈家门から8.5キロメートルであり、南の桃花島から1.7キロメートルである。北緯29度52分34秒、東経122度15分32秒である(図2)。蟻島は島全体が標高157.3メートルの大平岡からなり、島の周囲は7.82キロメートルである(図3)。蟻島の面積は2006年当時、まだ2.64平方キ



図2 蟻島の地理位置



図3 蟻島の全体図(2007年以前)



図4 2007年以前の蟻島



図5 現在の蟻島

ロメートルだったが（図4）、現在は、0.36平方キロメートルが埋め立てられ、造船所が建設されたために、3平方キロメートルになり、「半島船郷，半島人居」（半分は造船所，半分は村落）といえる（図5）。蟻島の全域は大蟻島，小蟻島，点燈山と鼠山という4つの島で構成される。行政は1つの⁽⁷⁾ 社区と3つの村落（長沙塘村，穿山岙村と後岙村，もとの5つの村があったが，今大興岙村，蘭田岙村は造船所に属している）と5つの経済合作社（長沙塘，穿山岙，後岙，大興岙，蘭田岙）を管轄している。

蟻島は解放前，登歩郷の一部であった。解放後，蟻島郷となる。蟻島の人口は1959年に戸数586世帯，人口2849人であり，1999年には高度経済成長期に入ってからもっとも人口が多くなり，戸数1236世帯，人口4573人であったが，それから出稼ぎ者が多くなるにつれ，戸数，人口とも減少してき

ている。蟻島の郷政府報告によると2006年には戸数1155世帯，人口4070人となり，2010年において戸数は1143世帯，人口は3969人となっている（表1参照）。表1は蟻島の戸籍による蟻島人口を示しているが，2006年の4070人（外来人口134人）から2011年の1万人余りになった（6000人余りの出稼ぎ者が含まれる。彼らの大部分は河南，安徽，湖北，四川から来ていた）。

1982年人民公社解体以前，蟻島の主な生業は漁業であったが，農業もあった。改革開放後，蟻島は「生態島」を建設⁽⁸⁾ するため，一切の農作業を停止し，かわりに漁業と工業のみが発展していった。2005年まで，蟻島は179艘の船を持ち，漁業労働力は1000余人，その他，ズックの布網，蟹籠，曳網，張網などの生産を行った。養殖業，燈光囲網業も蟻島の重要な産業である。蟻島の伝統的な作業方式である燈光囲網作業は図6のように，灯光を使い魚群を誘い集め，包围して捕らえるという作業方式である。また，干した小エビ

表1 蟻島の人口

年	戸数	人口数（戸籍がある人）
1959年	586	2849
1996年	1247	4619
1999年	1236	4573
2000年	1203	4485
2003年	1169	4116
2006年	1155	4070（外来人口134人）
2008年	1146	3987
2010年★	1143	3969（男1904，女2065）

★2010年本籍人口3969人，出稼ぎ者は，約6500人
資料：蟻島の郷政府報告より筆者作成

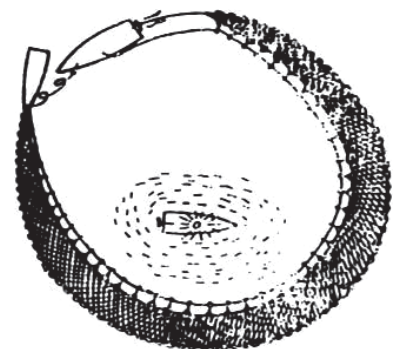


図6 燈光囲網の作業図

副業、漁業が含まれている。したがって、漁業人民公社も農業人民公社の一部分とされている。この時期の蟻島は人民公社の生まれる1958年から終わる1983年まで、〈1〉1949-1958、〈2〉1958-1983という2つの歴史段階に分けられる。人民公社はこの地区の経済と社会発展に深く影響を与えた。

〈1〉解放初期 1949-1958

1949年の解放後、中国政府は集団化政策を推進した。漁村の「長元制」は解体し、漁業互助組⁽¹¹⁾が登場した。1950年5月17日に蟻島は解放され、「螞蟻郷」に変わった。1951年に土地改革を実行し、漁業改革は漁区の土地改革を行い、漁民協会が成立した。その中には、4つの漁業生産合作社が含まれた。1953年6月、長沙塘漁業生産合作社を開設し、その後、後岙、大岙、穿山岙の3つの村は3つの漁業合作社を開設した。合作社は、管理委員会、監察委員会、社員委員会を設立し、合作社の大事な決定を相談して決め、いわゆる計画、労力、財務、物資、分配という経営管理制度を形成した。

〈2〉人民公社時期 1958-1983

1958年に毛沢東の「人民公社はすばらしい」という政策に基づいて、舟山政府は螞蟻島を実験基地として、漁業、農業、手工業、供給販売、信用という5つの合作社を合併し、いわゆる一島一郷一社という漁業人民公社を設立した。蟻島の漁業人民公社(写真1)は、全国でも初めての事例であった。そして、全社の2700余りの社員は村に属する5つの食堂に集合して食事をし、その代金は公社によって払われた。そして、公社は「十包」⁽¹³⁾を実行し、1958年の1年間における、「十包」の費用は10.02万元になり、社員1年分の分配の22.54%に相当した。1960年、「十包」は「六無要」⁽¹⁴⁾に代わった。1961年に「六無要」は中止され、食堂は解散した。



写真1 人民公社の旧趾

1961年～1978年、人民公社は事実に従い、ある程度の調整をし、多労多得の原則を制定した。文化大革命の時、更に定産奨励と平均分配を実行した。1978年以降、漁業経済体制は再び改革がなされ「按劳分配」と「多劳多得」が実現した。

1982年の憲法改正において、1958年以前の郷政府制が復活して、公社から行政機能がなくなり、82年の憲法改正による政社分離の原則に従って人民公社の活動を停止した。社隊(人民公社と生産隊)企業は、後に郷鎮企業に発展した。そして、漁業生産は株式合作制となり、現在に至るまでずっとこの制度を維持している。

II 「テーマ」としての伝統的な漁村女性の姿

鶴理恵子は、テーマについて「単なる労働力を意味する言葉だ」という概念を説明している。鶴氏は、「農漁村社会に根強く残る男尊女卑の思想や小規模家族経営による無償（あるいは無償に近い）労働、嫁としての様々な苦勞、農作業では一人前を期待され、その上、家事と子育てを担うことからくる過重労働、その為に教養・娯楽の時間が男性と比べて極端に少ない事、などがあげられる。（中略）舅や姑の指示通りに動く（「働く」ではない、「動く」である）だけの存在、婚家の農作業や農業経営、農業以外の労働（土木建設作業、野菜や花などの行商や朝市、魚の加工作業など）、家事全般などに関して、労力を提供するだけで何の参加も意見表明もできない存在としての自分である。労働の主体性を奪われたこうした扱いの記憶は『ただ牛や馬のように使われるだけだった』という。（鶴理恵子 2003）

1 「テーマ」として扱われた漁家女性

中華人民共和国解放前、漁村の女性は船に乗れないという伝統的な禁忌があったために、女性は漁業の作業に全く参加しなかった。その時代、男性が出漁している間、一切の家事は女性の仕事であった。漁家の女性は家事をするだけでなく、補助的な労働、例えば、網を洗ったり、修理なども行った。そして、男は遠洋へ出漁し、何ヶ月も戻ってこないで、漁村の農業生産はほとんど女性達が行った。そのため、漁家女性の労働比重は非常に重かったが、その労働に対する収入は少なかった。その時、一般的な家庭は大世帯であり、家族構成は3世代、4世代が同居するのが普通であったため、家事の負担も大きかった。そして、家族の構成は世代と性別によって地位が決まるため、男尊女卑の思想も深かった。家庭内の経済権利は家長が持ち、個人の給料はすべて家長に出し、家長が統一分配する。特に、漁家では、家の「見える」収入は全て男性の働きによるものだったので、長い間女性は家庭の中での地位は低く、彼女たちの労働も軽視されていた。鶴理恵子氏の言う「テーマ」と同じようなものである。

本稿では、蟻島での聞き取りと漁家民謡などを通して、漁家女性達がテーマとして位置づけられていたことを捉えてみる。

例えば、L・YJさんは1933年生まれの蟻島の漁家女性である。父親は漁工であったが、彼女が11歳の時亡くなり、母親も次の年に亡くなった。そして、L・YJさんは父の妹の家に、「童養媳⁽¹⁵⁾」として育てられ、妹は母の妹の家で養女として育てられた。L・YJさんの記憶によると、解放前、生活はとても苦しかった。その時の漁家民謡は漁民の苦しかった生活を表している：「沉在苦海中，漁家世代穷，破衣破裤破毡帽，草房像个破鸡笼，早上空饭桶，蜘蛛爬烟囱，鱼行大门空咙咚，卖儿卖女喝西风」この意味は、「漁家は代々貧しく苦海の中に生き、衣服とズボンと帽子は破れている。草ぶきの家は破れた鶏籠に似ている。貧乏だから、朝ごはんもなく、家も何もなくて、息子と娘を売り、飢えて生きる」である。

L・YJさんの父親は漁業資本家のもとで働いていた。母親も資本家の家で下女として働いていた。一年中、死ぬほど働いても、4人家族全員はぎりぎりの生活だった。両親が亡くなった後、L・YJさんと妹は漁工の家で育てられたが、そこも苦しい家庭であった。その時の漁家女性たちは旧社

会の最低層で暮らしていた。L・YJさんは「童養媳」だから、叔母の家のほとんどの家事や農作業をした。解放直後は、旧社会の思想がまだ残っていたため漁家女性の労働はまだテーマとして扱われた。しかし、婚姻自由の政策のおかげで、L・YJさんは童養媳の束縛から解放されて、婚姻自由の典型的な代表として、自分の意思で結婚した。結婚の際は、貧乏だったために、新婚当初の全財産といえは5キロの古い布団しかなかった。結婚後、L・YJさんは夫の両親と夫の2人の妹と一緒に暮らしていた。毎日、L・YJさんは農作業、漁業補助労働と家事など、姑の管理下で過ごしていた。自分の自由になる時間はあまりなかった。そして、毎月、家の収入は全部姑に集められ分配された。自分には決められる小遣いも報酬もなかった。

蟻島の漁家女性は解放の初期には、ほとんどがL・YJさんのような生活をしていて、伝統的な漁業経済を背景に、一般的な家庭の収入はとても低く、子供がたくさんいたため、人々の生活は苦しかった。

2 「テーマ」から「労働の主体」へ

(1) 家事から脱出

人民公社の成立後、漁業、農業、林業、牧畜業、その他の副業すべてが発展していったため、漁業生産の労働力は不足していき、そのため、女性が「半辺天」⁽¹⁶⁾の役割を発揮することが提唱された。旧社会の最低層の人々は、自分の生活のために働けると非常に興奮していた。女性は外に出て、男性と一緒に公社の労働に参加できるようになり、女性の労働は「工分」⁽¹⁷⁾という制度によって、家庭の収入として加わるようになったが、その結果、蟻島の女性たちは大変な苦勞をすることとなった。昔からの家事、農作業と補助的な漁業労働は言うまでもなく、生産資材と生活資材の運搬も女性たちの仕事になったためである。

(2) 主体意識の萌芽

人民公社の労働に参加しながら、漁家の女性たちは勉強を始めた。そして、家庭の収入源の1つとしても貢献しながら、公社の団体活動にも参加できるようになり、彼女たちは、徐々に家庭の経済を管理し始め、自己認識も変わってきた。

例えばL・YZさんは、人民公社の時期の婦女主任であり、その時の記憶は今でもはっきり持っている。人民公社の時、蟻島は、発展のために、儉約を提唱した。男性の社員が「男捕千担魚、不分紅、建造機帆船」⁽¹⁸⁾を提案すると、女性たちもすぐに「女種万斤薯、養活兒子囡」⁽¹⁹⁾を提案した。そして、お金を節約するために、まず18人の女性は「勤儉持家小組」⁽²⁰⁾を立ち上げ、「日蓄一分、月蓄三元、三年不分紅、老婆養老公」⁽²¹⁾というスローガンを叫び、1956年まで、10人組の「勤儉持家小組」が24組あった。この結果、女性たちは、6万円を節約でき、「婦女号」という機帆船を作った。また、女性は藁縄をない、そのお金を使って「藁縄船」という機帆船も作った。

また、R・JDさんは1922年生まれ、蟻島の漁家女性であり、人民公社時期、「三八海塘」⁽²²⁾の建造に参加した(写真2)。⁽²³⁾

「防波堤の建築はとても苦しかった。満潮になると、何も見えなくなり、退潮を待つ。退潮になると、満潮までの短時間の間に、一所懸命働いた。この防波堤の建造は3年以内で完成予定であった



写真2 「三八海塘」を建造している様子

が、200余人の漁家女たちは1年4ヶ月という短い期間で完成させた。以前は、資本家に搾取されていたけれども、今は自分のために働くことができるので、どんなに苦勞しても苦勞とは思わず、楽しく働いていた」と言った。

更に、W・YXさんは、1928年生まれ(24)の漁家女性であり、「婦女号」機帆船の「船老大」であった。「当時、私たちは何の文句もなく、防波堤ができれば、堤防の中で、農作業ができるようになると考えていた」と言った。また、

その時、漁村は遠洋生産を発展させようとしていたが、男性労働力が足りなかったので、10人の女性が男性と一緒に遠洋生産をした。昔、女は船に乗れなかったが、W・YXさんは、漁撈作業に参加し、船に乗れるだけではなく、「船老大」で「婦女号」の全員を管理でき、「女が船に乗ると船が転覆する」という迷信を打ち消し、女性も男性と平等であるという自信とともに、女性の地位を向上させた。

Ⅲ 現代の漁村における女性の労働参加と自己認識の変化

1 漁村における産業の変化と女性の働き

(1) 蟻島の社会構造——改革開放以降の蟻島

20世紀の1980年代は、世界の巨大な歴史的転換の時期でもあった。社会・経済、広く文化のパラダイム・シフトの時代に向かいつつあったといってもよい。この時期の中国は、全国的な改革開放政策を行い、市場経済と競争原理を導入し、高度経済成長を達成した。改革の初期段階では、農村で生産請負制が採用されて普及した。蟻島では1982年に、約30年続いた人民公社制度が解体した。そして、(25)「郷鎮企業」が設立されるとともに、現在までずっと続いている漁業生産の株式合作制が登場した。人民公社体制のもとでは、公社以外の職に就くことは不可能であったが、各戸（漁家）経営請負制の導入による漁家所得が向上し、漁民の中には自己運営する企業も出てくるようになり、出稼ぎ者も増加していた。

この産業の変化とともに、労働力のフェミニゼーションは大きな役割を果たした。表3のように、

2003年の蟻島の人口は4070人、労働力の人口は2325人、その中に、女性労働力の人口は955人で、労働力人口全体の41.1%を占めている。出稼ぎに行った人口は1218人で、労働力人口全体の52.4%に相当する。このデータから、18-50歳の労働力が出稼ぎする場合、家に残っているのはほとんど老人と婦人のみであった。つまり、女性はもう地元の主要な労働力となっていたのである。

表3 蟻島労働力の構成 単位：戸、人

	戸数	戸均	全郷(人)	占全郷比重(%)
人口	1155	3.5	4070	100
労働力		2.0	2325	57.1
男労働力		1.0	1370	58.9
女労働力		1.0	955	41.1
出稼ぎ人数		1.0	1218	52.4

データ：中国国家统计局，文号：公〔2003〕55号

しかし、近年になると、蟻島は生態島を建設する目標を制定したため、農業は島からなくなり、漁業資源は衰退した。それにより、出漁の収入は不安定になり、蟻島の産業も変化しつつある。海産品の加工、養殖業と工業などが発展するとともに、観光事業も急速に発展してきた。「漁家楽」という産業形態はこの機運に乗じて生まれた。

(2) 「漁家楽」から見る漁村における女性の働き

20世紀90年代初期、中国政府は、アメリカ、西欧などの観光農業を中国へ持ち込み、同時に各地の政府は市民に「農村・農家に入り、自然に近づこう」という活動を提唱していたので、「農家楽」という農家で余暇を体験することが中国で急速に普及していった。(池田孝之, 周晟 2008: 397~398) この「農家楽」という経営形態をモデルとして各地の漁村は自身の環境を利用し、「漁家楽」という業種を形成することができた。

① 「漁家楽」とは何か

「漁家楽」という業種は観光客が漁民の生活を体験でき、漁村の雰囲気を感じることができるものであった。蟻島の「漁家楽」は、漁民の家を民宿として利用していた(写真3)。具体的には、観光客は蟻島に着くと、地元政府によってグループに分けられ、漁嫂が1戸につき4-6人を漁家に連れて行き、次の日には、漁民の船に乗り、船頭と一緒に海に出漁し、獲った魚やカニなどは、民宿で地元の作り方で料理を作り、「一日の漁民の生活を体験する」という活動をしていた。

また、蟻島の人民公社時代の歴史についての観光や、近くの普陀山の観音の参拝などのレジャーも提供している。2005年までに漁家休憩ホテルという「漁家楽」は24ヶ所あり、10万人ほどの旅行者を招待し、4000万元も収入が増加した。



写真3 「漁家楽」

② 「漁家楽」の運営と女性労働者の主体意識の形成

「漁家楽」は主に個人経営である。一般的に、男性は海に出漁し、女性は家で「漁家楽」を運営する。一般的に「漁家楽」の利用者は上海、杭州、寧波の都市からの人が多い。8年間「漁家楽」を運営するLさんは、「経営を始めた初期の頃にはお客さんからは漁家楽の施設整備の不便とか、衛生状況が良くないとかの苦情もあった。私たちもできるだけ各方面のサービスを改善していった」という。近年、漁業資源が少なくなったため、一部の経営者は完全に漁業生産を止めて「漁家楽」を運営している。家庭の収入は漁業生産から「漁家楽」へ転換してきている。女性は昔の家庭の「テーマ」という役割から、完全に家庭の支柱になった。昔は、漁家の家事は全部女性の役割であったが、近年になり、男性が出漁へ行かなくなり、女性が忙しい場合には、男性も家事の一部をやるようになった。そして、現代の家庭の構成は核家族に変わり、漁家女性が夫と共同で家庭生活を営むようになってき

ている。

以上の変化により、漁家女性の自分が労働の主体となるという意識は、すでに形成されたと思われる。しかし、周辺の島の漁民もみんな「漁家楽」という業種をまねたため、利用者が少なくなり、最近では、2006年頃と比べ、若干閑散とした様子である。2007年以降は、地元の漁家女性の一部は東海岸造船所へ就職しつつある。

(3) 漁村工業化の影響——東海岸造船所の登場と外来の出稼ぎ女性労働者

建国以来、蟻島はずっと漁業経済が第一の産業であったが、近年に漁業資源が少なくなったため、2007年、東海岸造船所を建設し、蟻島の主要産業も漁業生産から造船工業へ転換している。2011年、蟻島の社会総生産値は13.6億元であり、前年より16.24%増えている。その中の工業生産額は、12.01億元で、漁撈業と漁業養殖の産量は37160トンであり、生産額は1.34億元になった。また、造船所設立の影響から、蟻島の人口は2006年の4070人（外来人口134人）から2011年に1万人余りになり（6500人余りの、おもに河南、安徽、湖北、四川省から来た出稼ぎ者を含む）、その中で造船所に就職している地元の人200人ぐらいである。しかし、造船所の用地のため、蟻島の「大岙村」は全体的に移動され、さらにもとの5つの経済合作社の中の大興岙と蘭田岙のおよそ島の半分の住民は、造船所の用地のために、移動させられてしまった。この造船所は、蟻島の経済に貢献しているが、一部の住民にはよくない影響を与えていると思われる。

2006年まで、蟻島の人口は4000人余りだったが、2007年になると、東海岸造船所が開業したため、島内で出稼ぎ労働者として造船所に従事する外来人口はどんどん増えていった。2010年まで、外来人口はすでに6500人を超える規模に達しており、その半分は女性労働者である。これから、蟻島の発展は外来労働者の存在を抜きにして語るができなくなっていくだろう。

出稼ぎ者は、1年のうち蟻島に10ヶ月以上暮らす人が9割以上を占める。これらの外来からの女性労働者は、自分の出身地の文化と生活習慣を持っており、蟻島特有の漁家文化と、漁村の特有の民俗とどのように融合するのか、また、これらの外来人口は「新島民」と呼称されるが、これらの「新島民」が蟻島にどのような影響をもたらしたのかを考える必要がある。

①出稼ぎ女性労働者のネットワーク

造船所に出稼ぎに来る人は四川省、河南省の農村からが大多数である。出稼ぎが初めての人は7割ぐらいで、引率されて来ている。その内、引率者が「家族・親族」、「友人・隣人・先に出稼ぎしていた同村の人」という者は8割である。例えば河南省出身の運搬人のある男性は、1人で家族の5人と同村の8人を連れてきたという。今、彼と奥さんの2人は造船所で働き、両親は賃貸の家でレストランを運営しながら、孫の世話をしている。彼はここでの典型的な優秀出稼ぎ労働者ともいえる。奥さんは造船所の仕事が休みの時には、自分の家のレストランを手伝う。また、同村から来た他の人は、故郷の料理が食べたくなった時にはよくこのレストランへ来て、ご飯を食べながら同郷人と交流することで、故郷を思う気持ちが慰められる。このような雇用者側の情報をもとに、故郷の家族、親族や同郷者たちを連れてくるのが造船所に普及している。この結果、先に来ている出稼ぎ労働者のネットワークを通じた採用形態は、地縁、血縁のネットワークを通じた就労の可能性を高めている。蟻

島における女性出稼ぎ労働者がそれぞれの故郷のネットワークを通じて出稼ぎに行き、結婚をすることで定住が少しずつ進んでおり、就労の機会があれば家族、親族あるいは友人や近隣の人々を、その都度呼び寄せている。

②生活空間としての工場

「半島船郷，半島人居」というように，造船所は蟻島の半分の土地を占め，外来労働者はほとんどが造船所に就労し，これらの外来労働者の生活空間は，労働場所である工場と，工場のすぐ近くの住まいである宿舎とに集約されている．先ほどの河南省の男性のような既婚者のうち，一部は工場外の蟻島の居民区で暮らしているが，未婚者は当然のこととして，既婚者であってもその8割が工場内で暮らしている．写真4は造船所が外来労働者のために建てた宿舎である．

違う地域の出身者が一緒に働き，暮らしも共にする工場では宿舎の配置について，同郷者同士が同じ部屋となるように配慮しているという．女性出稼ぎ労働者にとって，学歴は中学卒業が中心であり，共通語（普通語）の能力は一般の農民に比べれば高いが，自分の故郷の方言しか話せない人も確かにいる．こうした従業員は通常，工場の中で1日を過ごす他，休日なども自分の住んでいる工場内の宿舎の中で同郷者あるいは同僚たちと過ごすことが多い．



写真4 造船所の従業員宿舎

造船所には54の下請け会社があり，外来の従業員は大体下請け会社に管理される．したがって，造船所は，1つの下請け会社を1つの「グリッド小組」とし，その責任者はグリッド小組長となり，グリッド連絡員，グリッド治安長，グリッド安全員を設置するというグリッド化管理方法で全部従業員を管理している．例えば，雲南からの女性出稼ぎ労働者Z・SMさんは，ここに来たばかりの時に，グリッド組長，組員，医者，警察及び下請け会社の責任者への連絡方法が書かれた1枚の連絡カードと造船所の幹部の電話連絡先をもらい，何か問題が起きたときには，この電話をかけるように言われた．

また，春節には，帰郷と帰郷先から戻る従業員のためにバスを手配して送迎したり，従業員が故郷から連れてきた人の食住の世話をするなど，家族のように温かい労使関係に基づいて経営されている．実は，帰郷する出稼ぎ労働者が春節後に蟻島に戻ってくるかどうかについては，多くの企業が心配しているところである．造船所は，他のところより給料が高いし，従業員の宿舎の条件も非常にいいので，熔接従業員である安徽阜陽の出身のN・GFさんは，蟻島の造船所で3年間働いている．彼は自分の故郷の給料は1ヶ月1400元であるため，それに比べると蟻島の造船所で1ヶ月4500元の方がずいぶん高いと話してくれた．そして，造船所の給料が高いのに加え，ここの宿舎には全部エアコンが付いているから，春節後，自分だけではなく，もともと山東省で働いていた2人の甥も一緒に連れて戻って来たという．

③定住の可能性

蟻島で外来からの出稼ぎ労働者が定住するためには戸籍を移動することが必要だが、他省出身者の蟻島への戸籍の移動は難しい。一般的に、蟻島で正式に雇用された出稼ぎ労働者には、流動人口臨時居住登録証明書（臨時戸籍）が付与される。そして、臨時居住証を持ち、蟻島に3年間住むと、流動人口居住証が発行される。この流動人口居住証の期限は9年である。一定の条件を満たすと、蟻島の戸籍が取れるという。

造船所の労働条件にもかかわらず、上述した家族的で温情的な労使関係の下で、収入や仕事への高い満足感が維持され、定着性も比較的高くなっているものと思われるが、流動人口居住証を持つことは、蟻島の村民ではなく、例えば短期的な滞在労働者である出稼ぎ女性の場合、村の政治構造について、あまりよく知らない。彼女たちの内の9割以上は村幹部の名前さえ知らない。村籍を持たない一時的な滞在者には参政権は与えられない。その上、企業管理職のように村幹部との折衝が業務上必要となるわけでもない。村の政治構造は、企業組織の下級成員である出稼ぎ労働者の日常生活にとっては、さほど意味をもたないのである。

生活の面において蟻島にとっても、女性出稼ぎ労働者にとっても、もっとも重要な存在は彼女たちと蟻島とをつなぐ人々である。前述した造船所の管理システムは1つの下請け会社が1つのグリッド小組として、全従業員を管理している。こうした中間管理職の人々と出稼ぎ労働者は、日常的な交流が可能となっている。造船所でトラブルなどがあれば、これらの人々や、同僚と同郷者に頼むことが多い。蟻島の村民との交流は依然として少ない。彼女らの生活空間が職場と宿舍のみという極めて狭い範囲に閉塞され、各自が繋留される血縁・地縁のネットワークに依存している。実際のところ、造船所は蟻島の村落を分けている状態であるが、地元の村民も200人ぐらい造船所に就職しているため、同僚になると、時々、出稼ぎの人々は地元の村民の家に訪問することもある。しかし、方言の存在がコミュニケーションの障害になっていることに加え、滞在期間もまた短いことから、地元の村民との人間関係がそんなに濃密とは言えない。したがって、ここに定住してくる可能性はまだそれほど高くないのである。

また、造船所建設の数年前、蟻島の学校は廃止された。今、外来の出稼ぎ人口は増加していると共に、彼らの子供たちの教育問題が表出するようになる。造船所の400人の出稼ぎ労働者のアンケート⁽²⁶⁾（有効アンケートは332）によると、22%が結婚し、19%の人に子供がいる（その3%は蟻島にいる）、もし蟻島に学校があったとしたら、子供を蟻島に連れて来たいと考えている人は13%である。このアンケートから見ると、子供たちの多くは故郷で出稼ぎ労働者の両親や親戚が世話をしている。これは出稼ぎの人々が定住しない、重要で大きな要因の1つであると考えられる。

2 漁家女性の自己認識

(1) 漁村女性の楽しみと労働の位置づけの変化

解放前、無償労働であった漁村女性の労働がテーマとして扱われていたことが分かる。そして、解放から20世紀の1980年代まで、蟻島は漁業だけではなく、農作業もあったため、漁家の女性たちは、自分の時間があまりなかった。その時、漁家の仕事は天候に左右されることが多く、雨の日や農閑期には、比較的休みが取れることもあった。漁家の女性にとって雨の日は楽しみであったというが、逆

に、雨の日も農閑期も関係なかった、という話もある。特に60代の女性たちの記憶からの話である。

そして、人民公社時期、仕事のやりくりをつけ、家族に気兼ねしつつも、各種の“学習班”⁽²⁷⁾や“生産小組”へと出かけていく人が増加していった。特に、「人民公社の婦女連合会の会合やサークル活動は、何よりの楽しみだった。ふだんは家にいて農業や補助的な漁業だけの毎日だから、その日だけは、うれしかった」、「何かを勉強して自分が向上したり、自分の力と知恵を人民公社の発展と、自分自身のより良い生活に向けて精一杯努力するのが楽しみだった」と語る女性は多い。この時期には、嫁と姑は一緒に暮らすことが普通であったから、家の舅と姑が家計収入や労働及び生活全般を統括するというやり方だったために、漁村女性には労働主体の認識はまだ薄かった。

1980年代から1995年ぐらいまで、蟻島を「生態島」にする目標のために農作業を止め、人民公社も解体し、株式合作制となってから、漁村女性の自由時間はずいぶん多くなった。この頃は、漁家の収入は男性1人が出漁したら十分であり、女性は補助的な漁業と家事以外の仕事に従事する人はあまりいなくなった。実は、この時期の漁家の生活は他の農家の生活より裕福であったので、漁家の嫁の生活も気楽になった。したがって、周辺の農村の娘の中には漁民と結婚する人も増えていた。また、この時期、漁村社会全体に進行した改革により、漁村の家族は大家族から核家族へ転換しつつあり、家の舅と姑が労働組織及び生活全般を統括するというやり方は衰退していき、漁村女性は家の家計を管理し、自分の考えで判断し行動するという行動パターンを持つようになり、自立していった。

しかし、近年になると、漁業資源が衰退し、漁民の生活にも非常に影響があらわれるようになった。特に、休漁制度を施行してから、休漁期には、漁家の無就労時間が3ヶ月になる一方、漁家の生活も圧迫された。その結果、漁村の女性たちは起業の意識を持ち始め、「漁家楽」というレジャー漁業や水産品の養殖漁業を起業させることで、漁村女性である“漁嫂”を家庭経済の「わき役」から「主役」に変化させた。それに伴い専業主婦も減少しはじめ、現在では就労主婦が圧倒的に多くなってきており、忙しい主婦・母親・労働者として幾重にも役割を担っている。自由時間は少なくなったが、労働主体になると、自分自身の価値と家に貢献できる満足感は増加しつつある。彼女らは家や起業経営における地位や役割が大きく変化し、テマから労働主体への変化はあっというまに進んでいった。

(2) 現代の漁村女性の自己認識

① L・DNさんの場合

L・DNさんは、1970年に普陀区の桃花島の農家に生まれ、1990年に富裕な蟻島の漁家の夫と結婚した。非漁家の暮らしから一転して、不慣れで補助的な漁業や子育てをする漁家の嫁として生活し始める。「故郷の農家の暮らしより生活レベルが高くなり、不慣れでも早く慣れるために努力した」と言って、ほほ笑みを浮かべながら当時のことを思い出している。L・DNさんは、様々な面で協力的な夫に支えられながら、自家の漁獲物の加工や販売のかたわら、「三学三比」という“学文化、学技術、学政治、比成績、比貢献、比思想”のような漁村婦女連合会の活動に積極的に参加し、婦人同士のつながりなどを深めている。今、L・DNさんは漁業経済合作社の漁家婦人のリーダーになり、婦女連合会の活動で漁村婦女芸術団の活動などを自ら率先して行ったり企画したりするなど、蟻島の漁家女性たちに多大な影響を与えている。

② Z・HY さんの場合

Z・HY さんは、1965 年生まれの蟻島の漁家女性であり、同郷の漁民の夫と結婚した。自分も漁家の出身で、子供の頃から母親と一緒に家の労働によく参加していた。夫と結婚してから、当然のように家の各種労働を難なくこなした。結婚後の最初の 7 年は、舅と姑と一緒に暮らし、その後は自分たちの家を建て、舅と分家して、夫婦で独立して暮らしてきた。2000 年から、夫は自家の船で出漁し、Z・HY さんは自分で“漁家楽”の仕事を起業して経営を始める。最近では、“漁家楽”の経営が厳しくなっていたが、ちょうど造船所が開業し、地元の人を募集していたので、Z・HY さんは、“漁家楽”を休業し、造船所の管理者として働いている。「私は暇を好まない人間なので、稼げる仕事があれば積極的にやってみたいし、また、自家の経済は絶対に私が管理する」と言ってちょっと自慢気に話をした。

L・DN さんと Z・HY さんは、蟻島の典型的な女性たちである。L・DN さんは、外来の非漁家の出身として蟻島の嫁になり、漁家の暮らしは不慣れであったが、自分自身の努力によって、漁家の本当の女主人になり、労働主体として自分自身の価値向上も実現した。Z・HY さんは地元の漁家の出身であったため、結婚当初から漁家の生活を心得ていた。そして、家庭あるいは夫の従属人になりたくなく、自分自身の手で労働に参加し、家の経済支配権を持った。本人たちの努力や能力がそれぞれの人生を支えてきたというのはいうまでもないが、それに加えて、こうした他の漁家の女性たちと比べるとかなり恵まれているといえる状況も、個人の努力の後押しをしていることは明らかである。

3 婦女連合会が果たした役割

蟻島の婦女連合会は、人民公社時代では中国において全国的に有名な“漁村先進代表”である。この蟻島の婦女連合会では、今日、どのような活動が行われ、この組織がどのように位置づけられているのか、さらに蟻島婦女連合会を通して蟻島の女性の役割とは何であるかを明らかにしていきたい。

(1) 蟻島の婦女連合会の機構設置と機能

今日、蟻島の婦女連合会は、全郷の女性のみでの投票によって選挙で選ばれる 5 つの経済合作社で 2 人ずつの代表による合計 10 名の婦女代表から構成されている。そして、この 10 名の代表の中から 1 名の婦女主任を推選するがその任期は 3 年である。婦女主任の仕事は重要であるから、一般的に統治能力があり、文化に精通し、開拓精神を持ち、熱心に婦女と児童にサービスを提供する女性が優先的に推選されるという。

婦女連合会の基本的な機能は、全郷の婦女に“三学三比”競争活動を指導し、推進し、全郷婦女を代表して郷政府の社会事務を民主的に管理や監督する仕事に参加することである。婦女児童を保護する法律を宣伝、婦女児童についての問題を調査し、郷政府に対応策と意見を提出、婦女児童の合法権益を守る。婦女の家庭教育を指導し、特に託児事業を推進する。

(2) 漁村女性の集団活動

漁村社会から変容した蟻島の女性の集団活動は、蟻島の漁嫂の生活記録と婦女連合会の変遷と役割を中心に行われてきた。人民公社時代、婦女連合会は全郷の婦女を動員し、「勤儉持家小組」を設立

し、藁縄をない、「婦女号」「藁縄船」という機帆船を作ったり、「三八海塘」の建造に参加したり、全郷婦女の自身価値を最大限に発揮させた。

現代になると、婦女連合会は主に、婦女の権益や、労働や起業や、精神面について多くを指導する。郷政府の相応部門の責任者は、婦女労働力創業就業小組を設立し、婦女労働力創業就業サービスセンターを設立した。さらに婦女連合会の会員を中心に婦女労働力創業就業連絡小組を設立し、全郷の婦女労働力の総合情報を集め、彼女ら自身の価値を高めている。

また、蟻島の婦女連合会の会員を中心に“漁嫂余暇芸術団”を設立し、全郷の120人余りの文娛体育愛好者の漁嫂はこの団体に参加し、しばしば各種類の上演活動を行った。その結果、コンビニや個人宅の庭からよく聞こえたマーチンをする音はなくなり、それに代わって、街のあちこちに音楽の音が多くなっていった。例えば、写真5は、漁嫂らは普陀区の文芸公演のために、マスゲームのダンスを練習している場面である。このような娯楽活動は、1年間に数回行われている。



写真5 「漁嫂」らのダンスをしている場面

(3) 婦女連合会の役割

「テマ」から「労働の主体」への変化と共に、1日の過ごし方について自主的に決定することも確実に増えていった。その結果、漁村女性の生活時間は全体として娯楽・教養の時間も増加した。漁村女性の活動範囲も、自家の中庭程度の狭い範囲から各種活動の場所や知人・友人宅などへと飛躍的に拡大し、人間関係も大きく広がり、漁村女性たちの役割も複雑・多様化し、漁村生活への満足度は高まった。婦女連合会の活動及び“漁嫂余暇芸術団”の活動は、漁村女性たちの生活全般を豊かにする大きな役割を果たしてきた。

おわりに

現在、中国の漁村経済成長を推進しているのは“漁嫂”であるという認識は、かなりの人々に共有されている。蟻島でも、漁村のレジャー漁業の経営の柱に女性が位置し、労働の主体として活躍している。しかし、性別役割分業意識も依然として存在している。例えば、家事や育児は漁村女性に集中しており、自家のレジャー漁業や造船所での就労などと合わせると、女性の方が過重労働となっているのも事実である。

以上、解放後、漁村女性が「テマ労働」から「労働の主体」へ変化してきた過程を分析した。1980年代以降、漁村の経済制度が改革し、漁家の構造も変わってきている。その結果、「漁嫂」たちの労働参加は自主化・多様化してきた。そして、漁村女性の自己認識も、伝統のテマ労働から労働主体へと姿を変えていき、現在に至っている。

注

- (1) 舟山群島において、漁民の妻を「漁嫂」と呼ぶ。
- (2) 2011年7月7日、中国の浙江舟山群島新区の設立が正式に批准された。設立されれば、上海浦東新区、天津滨海新区、重慶两江新区に続く新たな国家級の新区となり、また国務院が批准した国内初の海洋経済主体の国家戦略的側面を持つ新区となる。舟山群島新区の範囲には、舟山市の現行の行政区域が含まれる。新区の機能は▽浙江省の海洋経済発展を先導する区▽海洋の総合開発のテスト区▽長江デルタ地域の経済発展の重要な成長極、などと位置づけられている。新区は今後、国内の大口商品の貯蔵、輸送、中継、加工、取引のセンター、東部地域の重要な海上の開放窓口、海洋や海洋島の科学的保護開発のモデル区、重要な現代型海洋産業拠点、陸海の一体化発展の先行地区になることを目指して努力するという。「人民網日本語版」2011年7月8日 (<http://j.people.com.cn/>)
- (3) 姜彬、筆名天鷹、浙江慈溪人、中国民間文芸学家、民俗学家
- (4) 金濤、アジア国際民俗学会会員、中国・定海海洋歴史文化研究会副会長
- (5) 中国明清時代に行われた領民の海上利用を規制する政策のことである。海賊禁圧や密貿易防止を目的とし、海外貿易等の外洋航海のほか、時には沿岸漁業や沿岸貿易（国内海運）も規制された。本来は下海通蕃の禁と呼び、海禁は略称であった。
- (6) 清・康熙の時、多くの生産道具（船・網）、資金を持つ漁業主（俗称「長元」）、雇工と一緒に出漁する人のことであり、この雇った漁撈を資本と労働力別に分配する制度を長元制と呼ばれる。
- (7) 行政単位で、居住環境を主体として社会機能が行使される、行政村と同一的等級の行政区域。
- (8) 島の自然保護の重要性を強調すると、「生態島」と呼ばれる。
- (9) 中国において、1958年から1982年の間に、農村を基盤として普及した、政治や経済、さらに文化、軍事までをも含んだ農業集団化の組織であり、農村での工・商・農・学・兵が結合し、「政社合一」という生産組織と行政組織が合体した地区組織の基礎単位である。
- (10) 日本の協同組合にあたる中国の労働者、農民あるいは住民が連合して組織した経済組織。
- (11) 漁業互助組は季節性互助組と一年中互助組があり、季節性互助組は規模が小さく、漁期の変化とともに労働する人が変化する。一年中互助組は季節性互助組より規模が大きく、一般的に3組の大対船を含め、漁期が変化しても、労働する人はあまり変化しない。
- (12) 漁業改革の時期、蟻島の居民は漁工、貧困漁民、一般漁民、漁業資本家という4つの階級に分かれた。
 - ①漁工は労働力を売り、雇われる人である
 - ②貧困漁民は、少しの網と小さい船を持ち、自分の労働力で暮らす人を指す
 - ③一般漁民というのは、船、網を持ち、1人2人の漁工を雇い、自分も労働に参加する人である
 - ④漁業資本家は自分が労働参加せず、漁工を雇って暮らす人である。
- (13) いわゆる衣、食、住、教育、福祉、病気と出産、入浴、旅費（蟻島から沈家門までの乗船切符）、映画、葬儀がすべて無料である。
- (14) 社員は定量標準に従い食料が要らず、幼稚園、老人院の費用は公社に払い、社員の子どもは中学校までの学費が公社で負担され、社員の出産費用は公社に払い、社員は結婚するとテーブル2つ分の酒席の費用を公社に払い、社員の公務中のけがや子どもと老人の医薬費は公社が負担する。
- (15) 将来息子の嫁にするために幼い時から引き取って育てた女の子
- (16) 女性は男性と同じように、家庭と社会の責任を負担し、経済の発展に平等的役割を發揮する。
- (17) 労働に対して「分」を定める精算制度
- (18) 男は機帆船を作るために、千担の魚を獲るが、利益を分配しない。
- (19) 女は万斤のイモを植え、子どもたちを養う。
- (20) 蟻島の女たちが仕事に励み、無駄な出費を少なくする組織である。
- (21) 中国では妻は老婆と呼ばれ、夫は老公と呼ばれる。「毎日一分畜えれば、毎月三元畜えられ、三年利益を分配せずに、妻の力で夫を養う」
- (22) 3月8日は婦女節のため、「三八」で女性を指す。この防波堤は全て女性が作ったため、この名になる。

- (23) 写真は「蟻島創業記念室」の資料である。
- (24) 船頭
- (25) 中国の郷（村）と鎮（町）における中小企業。人民公社時代には社隊企業と呼ばれたもので、人民公社廃止後に郷鎮企業と改称。村営、私営などさまざまな形態を持ち、市場経済化のなかで飛躍的に発展した。
- (26) 浙江省普陀区政府ネット <http://putuo.gov.cn/jyta/783.html>
- (27) 漁家の女性たちは解放前はほとんど非識字者であり、解放後、人民公社は“学習班”を設立して彼女らに文化を教えた。
- (28) 舟山群島の休漁期は1995年から始まり、毎年6月15日0時～9月15日24時である。

参考文献

日本語文献

- 荒一能 2011「瀬戸内海漁村における女性の働き」『常民文化』34: pp.83-97
- 池田孝之, 周晟 2008「中国・湖南省における『農家楽』の実態に関する考察：その1「農家楽」の発展経緯について」日本建築学会学術講演梗概集 pp.397-398
- 岩崎繁野 1957『漁業における歩合制度と船頭制度に関する研究』水産研究会
- 太田出, 佐藤仁史, 稲田清一, 呉滔 2007『中国農村の信仰と生活—太湖流域社会史口述記録集』
- 大橋克巳 2011「成島地区の母親たち——若妻会から「たんぼぼくらぶ」へ」『成島の民俗』pp.23-55
- 岡田照子 2012『瀬川清子——女性民俗学者の軌跡』岩田書院
- 後藤知美 2012「創られていく労働観——旅館業を中心として」『Area Studies Tsukuba』33: pp.167-190
- 瀬川清子 1962『女のはたらき 衣生活の歴史』未来社
- 1981「海村婦人の労働」柳田国男編『海村生活の研究』pp.115, 国書刊行会
- 高桑守史 1994『日本漁民社会論考』未来社
- 靄理恵子 2003「『テマ』から『労働の主体』へ——兼業化と農業女性の自己認識の変化」『日本民俗学』233: pp.1-30
- 長沼さやか 2010『広東の水上居民——珠江デルタ漢族のエスニシティとその変容』風響社
- 服部誠・山崎祐子・八木透 2008『日本の民俗7男と女の民族誌』吉川弘文館
- 副島久実 2010「水産物の地域流通に関する研究——漁村女性起業に着目して」、『海洋水産エンジニアリング』10(92): pp.59-62
- 三木奈都子 1997「家族経営漁家における性別分業と女性労働」『漁業経済研究』41(3): pp.1-18

中国語文献

- 沈可 2012「家庭構成中多代同堂比重下降将減少女性労働参与」,『人口信息』第二期
- 蘇群, 周春芳 2005「農村女性在城鎮的非農就業及遷居意願分析」,『農業經濟問題』第5期
- 孫衆 2009「正視城鎮在業婦女家務労働価値」,『人口与經濟』第1期
- 王蕊興 1967『龜山島——漢人漁村社会之研究』
- 楊国楨 2000「論海洋人文社会科学的概念磨合」,『厦門大学学报』第一期
- 姚先国 2005「家庭收入与中国城鎮已婚婦女労働参与決策分析」,『經濟研究』
- 于洋 2007「漁民社会交往与漁村社会轉型關係研究」,『中国漁業經濟研究』02期 pp.13-16
- 『舟山市誌』,1992, 浙江人民出版社
- 『舟山漁誌』,1985, 海洋出版社